

## 要旨

2011年、新たに2か所が世界遺産に登録され、日本の世界遺産の総数は現在16に上る。その中で、本論では1995年に日本で4番目の世界文化遺産として登録された「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の中心である、岐阜県白川村荻町地区の観光がもたらした「文化」の変容と保全について検討する。

本論の目的は、荻町地区において、観光化が地域に与えた影響について、特に「文化」の保持と変容に焦点を当てて検討することである。先祖代々受け継がれてきた世界遺産に登録された家屋で民宿を営む経営者を主な対象としてフィールドワークを実施し、荻町地区の観光化がその地域の「文化」に与えた影響について検討する。白川郷は住居として利用されながらも世界遺産に登録された点において、世界文化遺産の中でも稀な存在である。

一般の住民ではなく民宿経営者を調査対象に選んだのは、彼らは合掌造りでの民宿経営という観光に関わる側面と住民の一人としての生活者という両面を併せ持っているので、観光化による変化をもっとも感じ取っているのではないかと考えたからである。

本論の構成は、I章で観光が与えた生活の変化に関する先行研究と、世界遺産登録が住民に与えた影響に関する先行研究、岐阜県白川村における先行研究を検討し、本論の位置づけを明らかにし、調査概要を述べる。II章では、本研究の調査対象である白川郷の概要と、白川郷と合掌造り家屋の関係性、白川郷の歴史、そして白川郷の観光の中心でもある荻町地区の保存運動の歴史について明らかにする。III章では、筆者が2011年9月26日から30日まで荻町地区で実施した、主に民宿経営者を対象としたインタビュー調査に基づいて、観光化が人々の生活に与えた影響や、観光化による住民の苦悩や地域に対する想いを明らかにする。最後にIV章では、インタビュー調査で得た結果をもとに、観光化が地域に与えた影響について、特に「文化」の保持と変容に焦点を当てて考察を行う。

結論として、住民にとって観光は合掌造りを守るために始まった産業だが、観光化によって、村は経済的に豊かになり、駐車場問題や観光収入を求める住民の出現や住民同士のつながりの希薄化といった変化がもたらされた。しかし、筆者がインタビューをした観光の担い手である民宿経営者は、観光による経済効果だけを求めず、地元の人々との繋がりやお祭りを重視し自分達の生活を大切にしたい家族経営の方針を貫いていた。合掌造りという生活の場で観光を営む民宿経営者に見られた生活と民宿経営を両立させるバランスの取れた生活スタイルによって、荻町地区の人々のつながりやお祭りが、白川郷の「文化」として守られていくと考える。